

薩摩半島北部植生調査報告

昭和 52 年 3 月

横浜国立大学環境科学研究センター

ま え が き

鹿児島県下の植生調査，植生図化は，日本文化の潜在基盤とも言うべきヤブツバキクラス林（照葉樹林）の典型と，さらに我が国ブナクラス林域南限の植生や土地利用形態の解明に役立つ。同時に自然環境の保全・創造・賢明な将来の発展計画を基礎ともなる。

本報告は，大隅半島，薩摩半島南部，奄美群島の調査に引き続き，薩摩半島北部および甑島の植生調査および現存植生図化（縮尺1:50000）がまとめられている。

海岸沿いの砂丘，断崖植生から霧島山（韓国岳1700m），紫尾山（1067m）までの多様な自然環境に支えられて存続している各種自然植生の残存林の群落組成，分布が明かにされた。同時に川内川流域の丘陵，谷部から下甑島，上甑島の海浜山腹斜面に至るまで長い間に様々な人間の活動や産業，土地利用形態によって，自然植生が変形させられ，代償植生として持続している各種人為植生に象徴される，県民のいきざまと土地利用形態が考察されている。

鹿児島県土の植生の科学的な現況と，将来の発展に備えての自然環境保全計画の基礎資料としても本報が有効に利用される様に期待したい。

本植生調査の計画，現地調査にあたり変らない御援助，御協力戴いている鹿児島県当局，とくに内山裕環境局長はじめ関係の皆様に厚くお礼申上げたい。

昭和52年3月

横浜国立大学環境科学研究センター

宮 脇 昭

調査団構成メンバー

宮 脇 昭 ¹⁾	中 村 幸 人 ¹⁾	大 野 照 好 ²⁾
奥 田 重 俊 ¹⁾	大 山 弘 子 ¹⁾	大 望 月 陸 夫 ³⁾
藤 原 一 絵 ¹⁾	山 田 政 幸 ¹⁾	河 野 耕 三 ⁴⁾
鈴 木 邦 雄 ¹⁾	箕 輪 隆 一 ¹⁾	井 上 香 世子 ⁵⁾
原 田 洋 ¹⁾	小 川 吉 平 ¹⁾	
佐々木 寧 ¹⁾	木 村 雅 史 ¹⁾	

1) 横浜国立大学環境科学研究センター

2) 鹿児島県立短期大学

3) 秋田県立湯沢高校

4) 宮崎県立延岡第二高校

5) 箱根町湿生花園

目 次

まえがき	
はじめに	6
I 自然環境	8
1. 気 候	8
2. 地形・地質	8
3. 人為的影響	9
II 植生概観	10
1. 薩摩半島北東部	10
2. 薩摩半島北西部	10
3. 長島・黒之瀬戸島	11
4. 甌 島	12
III 調査の対象と方法	13
1. 植生調査法	13
2. 群落組成表の作製	15
3. 現存植生図の作製	17
IV 調査結果	18
A 植生単位	18
I 自然植生	18
a ヤブツバキクラス域	18
1. ミミズバイースダジイ群集	18
2. イチイガン群落	19
3. イスノキーウラジロガン群集	19
4. シキミーモミ群集	25
5. ムサシアブミータブ群集	27
6. オニヤブソテツ—ハマビワ群集	31
7. トベラーウバメガン群集	31
8. ジャヤナギ群落	35
9. ハマナツメ群落	36
10. ハマグルマーコウボウムギ群集	37
11. チガヤーハマゴウ群集	37
12. シオカゼテンツキーコウライシバ群落	39
13. サツマノギク—ホソバワダン群落	39
14. イソテンツキ群落	41

15.	塩沼地植物群落	41
a	ナガミノオニシバ群集	42
b	コオニシバ群落	42
c	シオクグ群集	42
d	フクト群集	42
e	ハママツナ群集	42
16.	ビロードテンツキ—ハタガヤ群落	44
17.	抽水植物群落(ヨシクラス)	44
a	シログワイ群落	44
b	マコモ群落	44
c	シチトウイ群落	45
d	サンカクイ群落	45
e	ヨシ群落	45
f	コウキヤガラ—フトイ群落	45
18.	アキカサスゲ群集(仮称)	47
19.	ナガボノシロワレモコウ—ヌマトラノオ群落	47
20.	セキショウ群落	48
21.	オギ群集	50
22.	ツルヨシ群集	51
23.	アゼトウガラシ群集	52
24.	ヒツジグサ群落	52
b	ブナクラス域	53
25.	シラキーブナ群集	53
26.	オオマルバテンニンソウ—ブナ群集	56
27.	ツクシコウモリ—ミズナラ群落	59
28.	ミヤマキリシマ—アカマツ群集	61
29.	ミヤマキリシマ—ヤシャブシ群落	64
30.	コバノクロヅル—コバノミツバツツジ群落	64
31.	コックバネ—ヒカゲツツジ群落	67
32.	ショウジョウスゲ—ミヤマキリシマ群落	68
33.	マイヅルソウ—ミヤマキリシマ群集	68
34.	ツクシテンツキ群集	71
II	代償植生	71
1.	ハクサンボク—マテバシイ群落	71
2.	アラカシークスノキ群落	76
3.	ホノバタブ群落	80
4.	コシダ—シャシャンボ群落	80
5.	アオモジ群落	80

6.	アカメガシワ—カラスザンショウ群落	87
7.	クスノキ植林	87
8.	ヤブツバキ植林	87
9.	スギ・ヒノキ植林	92
10.	クロマツ植林	96
11.	アカマツ植林	99
12.	カンワ植林	99
13.	クヌギ植林	99
14.	モウソウチク林	104
15.	メダケ群落	105
16.	ホテイチク群落	105
17.	リュウキュウチク群落	105
18.	ハウライチク群落	112
19.	チガヤーススキ群落	112
20.	コマツナギ—シバ群落	115
21.	ノアサガオ群落	116
22.	オオマルバノテンニンソウ群落	116
23.	コアカソ群落	119
24.	ノブドウ—ツルコウソ群落	120
25.	カニクサー—ホラシノブ群落	120
26.	イタチガヤ—ホラシノブ群落	120
27.	カゼクサー—オオバコ群集, オヒシバ群落およびハイコヌカグサー—オオバコ群落(路上雑草群落)	124
28.	ベニバナボロギク—ダンドボロギク群集	124
29.	クマノギク—ヨメナ群落	128
30.	ヒメムカシヨモギ—オオアレチノギク群落(耕作放棄畑地雑草群落)	129
31.	コミカンソウ—ウリクサ群集	129
32.	シロツメクサー—カモガヤ群落(外来牧草播種地)	129
33.	ハイキビ群落	133
34.	ノミノフスマ—ケキツネノボタン群集	133
35.	ウリカワ—コナギ群集	135
B	現存植生図	136
1.	薩摩半島北東部	136
2.	薩摩半島北西部	136
3.	長島・黒之瀬戸島	137
4.	甌 島	138
V	薩摩半島北部・長島及び甌列島の環境保全と新しい土地利用・自然利用に対する生態学的・植物社会学的諸提案	139
	参 考 文 献	141
	写 真	143

は　じ　め　に

人類に限られた地球上で、日本人がかぎられた国土で、そして九州の南部に位置する鹿児島県が、かぎられた県土でいかに間違いなく生きのび、固有の文化を発展させるかが、今後の課題である。地球上に人類が誕生して300万年来、いかにして自然を開発し、邪魔者をすべて排除して人間だけがより良い生活を築くかに努力が集中されてきた。

最近のいわゆる公害や自然破壊などの環境問題は、自然と対決し、邪魔者を皆殺しにしようとした人間の努力が局部的に自然の許容力あるいは浄化能力を超たところに問題が生じている。反面我々がそれぞれの限られた自然の許容限界の枠の中でより豊かな生活を行うとすれば、ある程度の自然の開発・産業の発展との共存についても真剣に考えなければならぬ。

とくに鹿児島県のように温暖で豊かな自然環境に恵まれながらも、県民の生活水準について山間部や離島で日本人の現代の平均的水準までの向上が望まれているところでは県土の将来計画に際して行政と県民が一体となって十分に検討し、すべての県民の明日の安全な生存権、生活権の保証のためには、今何がなされるべきかについての総意が得られなければならない。

将来計画のために必要な基礎資料としては行政、経済さらに各種の自然条件についての精度の高い十分な科学的な調査が前提となる。その際に基本的で重要な課題は、人間の本質的の共存者であり、土地のあらゆる生物的生産の母体である植生の実体とその具体的配分についての総合的な調査・研究・把握にある。

鹿児島県では昭47年度から県下全域の自然環境の主要構成者であり、また生物的生産の基盤であり、新しい環境創造のための“生きた構築材料”である郷土の植生の生態学的、植物社会学的な基礎調査が行われてきた。その成果はすでに大隅半島の植生と植生図化の研究・調査成果が、1974年の国際植生学会日本大会の鹿児島県内調査に際して、各国の現代の第一人者の生態学者たちによって高く評価されている。(宮脇1974, Chalotte Ellenberg 1977)。

本報は薩摩半島北部と甑列島についての植生調査結果と現存植生図化(1:25000)の調査・研究結果である。今回の植生調査で屋久島および周辺の一部島しょを除いて鹿児島県下のほぼ全域についての植生調査と、その成果を基礎とした現存植生図化の研究が一応終つことになる。

人間生存の基盤としての植生の調査結果が、自然環境や人為的干渉の植生の側からの診断図ともいふべき現存植生図と共に間違いの少ない鹿児島県土の利用と、その基礎としての自然環境の保全、必要に応じて積極的な創造に十分役立てられるように望みたい。

なお、本調査のはじめからつねに激励載き、またお世話になった内山裕環境局長をはじめ鹿児島県の関係当局の皆様へ厚く御礼上げたい。

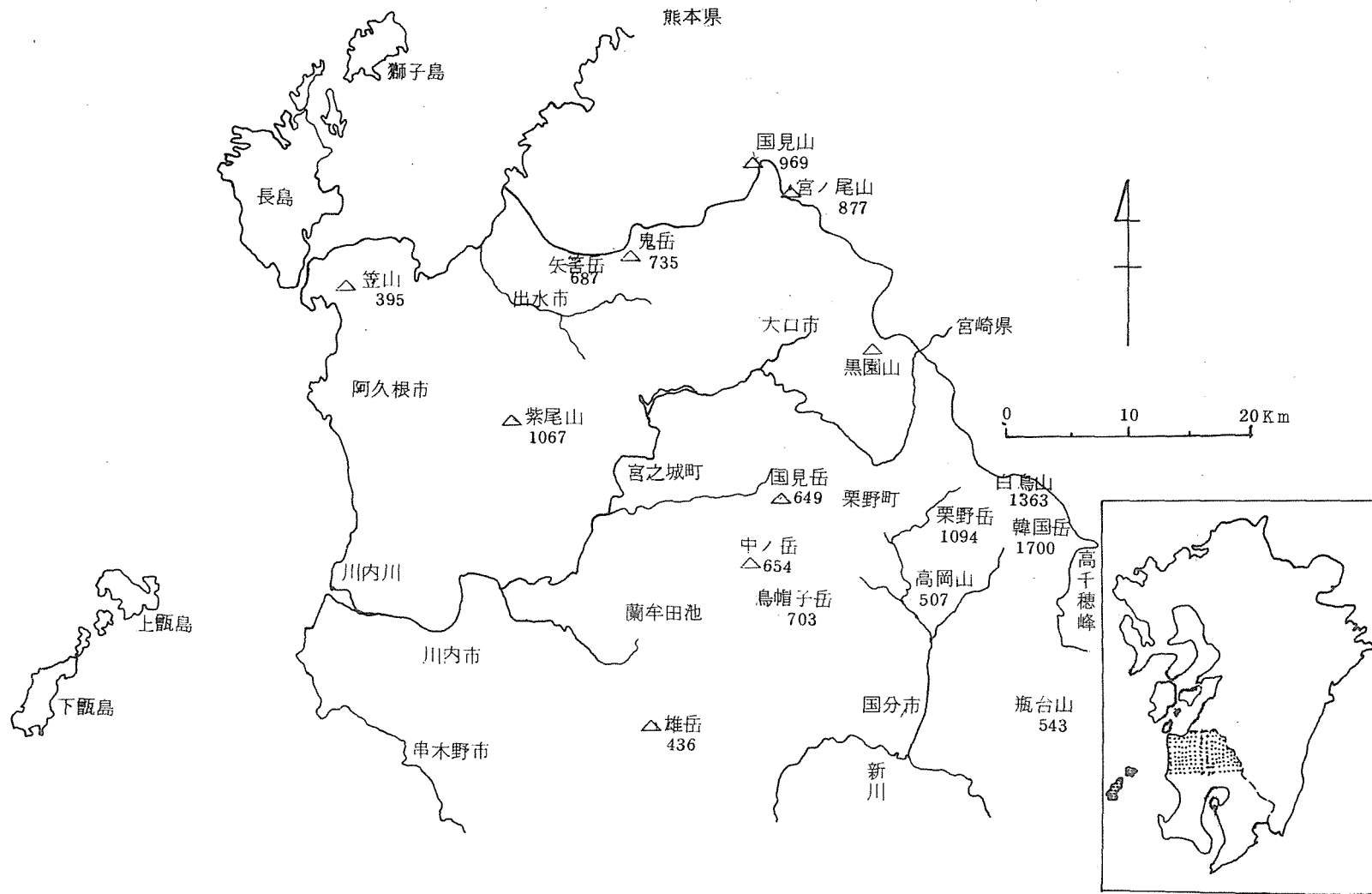


Fig. 1 調査地域概観